

CeMI 気象防災支援・研究センター

News Letter

Contents

1. 高田城下の雪竿
2. 2024年の世界の平均気温について
～2023年を上回り記録更新の可能性～
3. お天気よもやま話 ～ “二つの顔” がある注意報

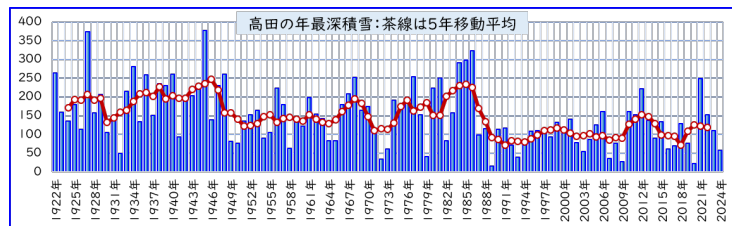


1 高田城下の雪竿

本格的な雪のシーズンになりました。日本は世界的に見ても有数の多雪地域ですが、100年を超えるデータがある国内の気象官署〔旧測候所=特別地域気象観測所を含む〕155か所の中で、山岳官署を除いて最深積雪の値が最も大きいのが高田〔新潟県上越市〕です。1922年の観測開始以来の最深積雪の極値は1945年〔昭和20〕年2月26日の377cmです。近年は300cmを超えた年はなく、最後の300cm超えは1986〔昭和61〕年2月6日の324cmです。

旧高田測候所は標高12.9m、海岸からの距離はわずか8kmにも満たない平地に位置していますが、過去の記録を見ると桁違いの雪が積もることがあります。地元にあった高田城は江戸の初期、1614〔慶長19〕年に徳川家康の六男の松平忠輝によって築城されました。雪が多かったことから、築城当時から大手門前の広場に雪を計るものを設置していたということです。

高田市史によれば、『藩政時代には城の大手廣場に五寸角一丈の標竿〔しるしさお〕を建つ。俚俗丈杭〔じょうくい〕と呼び、又雪竿とも云ふ。藩の作事方にて管理し、積雪之を埋むる時は、継ぎ足し幕府に届出づる例あり』とあります。築城が今から約400年前で、その後17世紀の中頃から大雪の記録が残っています。



史市に記載されているものでは、1665〔寛文5〕年1丈4尺〔約424cm〕、1749〔寛延2〕年1丈6尺〔約485cm〕、1814〔文化11年1丈5尺〔約455cm〕など400cmを超えている年があります。昭和以降の最深積雪が377cm〔約1丈2尺4寸〕ですから、古い記録ではそれを上回るとんでもない値が残っています。

近年、冬の気温の上昇傾向に伴って、北陸地方や中国地方の日本海側の地方では降雪量が減って来ていますが、日々の降雪量で見ると1日に数十センチもの雪が降ることも稀ではなく、交通障害など人々の生活に大きな影響を及ぼします。数値予報など予測精度の向上によって、大雪についても数日前から注意を呼びかける気象情報が発表されるようになって来ています。冬の期間、特に雪や低温に関する気象情報に関心を払い、早めの対策で雪による影響を最小限に抑えたいものです。



2 2024年の世界の平均気温について

～2023年を上回り記録更新の可能性～

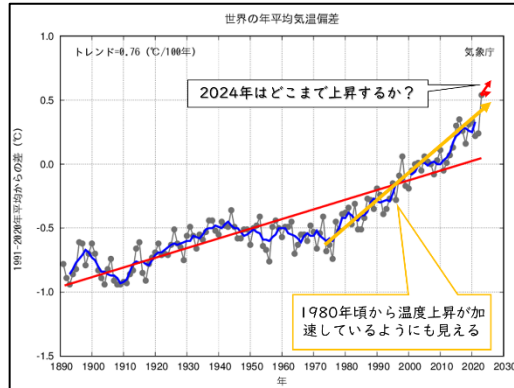
2024年の世界の平均気温ですが、11月までの時点で過去最高気温を記録するのではないかとされています。

右図は世界の年平均気温の偏差の経年変化を示したのですが、2023年は過去最高気温をはるかに超えて過去最高を記録しました。世界各地で猛暑や干ばつ、大雨などの災害が多発したことから「地球沸騰化」の時代に入ったとも言われました。

2024年になっても気温の高い状態が続いており、2024年の月世界平均気温は、6月まで連続して過去最高を記録しました（気象庁HPより）。その後も11月まで2023年に次ぐ2番目の高温となっていますので、2024年の世界の年平均気温は過去最高になりそうですね。MLBの大谷選手の記録更新は見ていて楽しいですが、温暖化の時代での記録更新の話は、ちょっと嫌な話ですね。

2024年を少し振り返ってみましょう。日本では、9月には地震の被災地でもある能登半島で記録的な大雨被害が発生しました。この大雨には、日本海の海面水温が上昇していると考えられ、温暖化が海面水温の上昇に寄与している

のではと言われました。なお、海面水温の上昇は、気象への影響だけでなく、北海道でブリが大量に水揚げされるなど生態系への影響もあります。



再び図にかえると、1980年頃から急激に気温が上昇しているように見えます。このまま上昇していくと・・・地球温暖化が進むと極端な現象が多くなるそう

です。今後、「猛暑」「大雨」等、想像をはるかに上回るような現象（災害）に備えることが必要になるのでしょうか。

ちなみに、先月号でも書きましたが、海面水温の上昇は大雪の要因にもなります。

3 お天気よもやま話 ～“二つの顔”がある注意報

大雨注意報、雷注意報等でおなじみの気象注意報。実は16種類も発表されていますが、下の表に示すように、気象警報がないものとあるものがあります。例えば、今の時期に太平洋側の地域でよく発表される乾燥注意報には警報はありません。一方、大雨注意報には大雨警報が、強風注意報には暴風警報があるといった具合です。

表 気象注意報の種類

警報なし	警報あり
雷、融雪、濃霧、乾燥、なだれ、低温、霜、着氷、着雪	大雨、洪水、強風、風雪、大雪、波浪、高潮

警報がある注意報には“二つの顔”すなわち以下の二つの役割があると言えます。

①比較的軽微な災害への注意喚起の役割

②警報の前段階としての役割

例えば、大雨注意報が発表された場合、その注意報が①の役割として注意報どまりなのか、あるいは②の役割、すなわち警戒レベル3相当である大雨警報の前段階の警戒レベル2としての呼びかけなのかは、自分で読み解く必要があります。



掲載内容へのご意見、そのほかサービスに関するご相談・ご要望等ございましたらお気軽にご連絡ください。

○早期注意情報で警報級の可能性が[中]や[高]になっている。

○大雨等に関する府県気象情報が発表されている。

○気象庁HPの警報・注意報の表示で警報に切り替える可能性に言及があり「！」がついている。（下記表示例参照）これらのうち一つでも当てはまれば②の役割と捉えるとよいでしょう。

福岡県の警報・注意報（注意警戒事項）	
2023年07月08日05時23分 福岡管区気象台 発表	
注意警戒事項	福岡県では、土砂災害や竜巻などの激しい突風、落雷に注意してください。福岡、北九州、筑後地方では、強風に注意してください。福岡、北九州地方では、高波に注意してください。

福岡市の警報・注意報（発表状況）	
2023年07月08日05時23分発表	
福岡市	警報・注意報・警報の切り替え
警報・注意報(継続)	大雨注意報 雷注意報 強風注意報 波浪注意報
警報の切り替え	8日昼過ぎまでに大雨警報（土砂災害）に切り替える可能性が高い

気象庁HPの警報・注意報の表示例

気象注意報の二つの顔をしっかりと見分けて、逃げ遅れないよう早めの対応を心がけてください。ただし、①の役割の注意報であっても、生活に影響のあるような災害や事故は起きることがありますので、軽んじることは禁物です。

